

シベリア抑留体験記

静岡県 橋本茂次

出生から入隊まで

大正二年一月二十五日小笠郡中村西之谷五一七番地において出生。昭和二年三月中村尋常高等小学校高等科第二学年卒業、昭和五年三月静岡県立小笠農学校第三学年卒業、昭和六年四月静岡県蚕業試験場蚕業講習生として入学、昭和七年三月同講習修得、同年四月より志太郡葉梨村蚕種製造業者彦坂権一方蚕業技術員として勤務。昭和八年四月より五月まで東京市京橋区片倉製糸紡績株式会社駿東郡大岡村蚕種製造所蚕業技術員として勤務。昭和八年五月より九月まで静岡県蚕業取締吏員として静岡県蚕業取締所静岡支所勤務。昭和九年四月より静岡県小笠郡、榛原郡養蚕業組合蚕業指導員として東山口村所在養蚕実行組合駐在勤務。昭和十二年四月より土方村所在養蚕実行組合駐在勤務。昭

和十四年四月より南山村立青年学校指導員勤務、昭和十五年八月農業科一科目につき、試験検定の上専科正教員を免許され同校に助教諭として勤務した。

召集入隊

昭和十七年十二月十三日臨時召集令状により、十二月十八日中部第六部（騎兵第三連隊）へ入隊。古い軍服、襦袢、跨下に着替え、編上靴に履き替えて毎日小幡原で演習をした。自分は速射砲班で、八人組で戦車を撃つ練習をした。三月末、一期の検閲が済んだ。

転属

昭和十八年三月三十一日付を以て満州第五三七部隊（第十五軍馬防疫廠）へ転属を命ぜられ、新衣服と交換して帯剣、銃一丁にて出発し、四月四日同隊到着、四班編制の各班に編入された。約一カ月間は軍事訓練を実施され、後、各希望部署に配属された。

各部署

部署には事務、検査、厩舎、自活（農業）などがあった。自分は初め自活部に配属された。部隊の近くや三里も遠い所に農場があったので二人でそちらで寝泊

りしていたこともあった。次には既舎勤務となった。

兵舎は四分の一が地下の組立小屋の丁種建築で、冬が長くてしかも零下数十度の寒さである。無論兵舎内ではペーチカを焚いて暖をとったのである。

蹄鉄工務兵の修業

昭和十八年八月より蹄鉄工務修業兵として満州第六二五部隊勤務となり、蹄鉄を作ったり馬の蹄に打ち付けたりしてなかなか大変な仕事であった。十月三十日、同修業兵を終了して原隊に復帰した。

南方戦線転属

昭和十九年になると、南方戦線へ転属する者もあり、帯剣や小銃等を相当持参して行ったので部隊の兵器は相当減少していた。

ソ連軍侵攻

二十年八月八日、突如ソ連の空襲次いで来襲、弾薬も兵器も不十分な我が隊ではあるが直ちに参戦の準備をした。新被服（冬服）の配給、携帯食糧の配給等をして出勤準備をした。

九日には牡丹江省大肚子川だいとしせんまで斥候に行った。（下

士官斥候長、兵二名）既に住民の姿は見えなかった。

出動

十日朝、貨物自動車七台に器具、食糧などを載せ分乗して出発した。羅子溝ろしこうにて部隊全員集結して進行方向を決め、二個分隊にて進んだ。我が隊は隊長小林中尉殿、自動車二台で進み十四日に大咸廠だいかんしょうに到着して、ソ連の戦車が来攻すると言うのでその準備をして待機したが、来なかった。

終戦伝達

十六日になって終戦になったことを伝達された。それより毎日雨多く道の悪い所を苦労して行軍し、九月二日東京城にて第二六九大隊に入り、ソ連軍の指揮下に入る。二道河子にて武装解除を受け、毎日行軍して九月十二日牡丹江に到着集結した。十六日、東京ダモイと騙されて、上下二段の有蓋貨車に積み込まれ、家畜並みの扱いでハバロフスクを経て長途シベリアに送られ、九月二十七日午後三時ころコムソモリスク駅に到着。それより徒歩にてコムソモリスク地区第八收容所へ四時半ごろ到着した。

収容所と作業

収容所へは他部隊の人と共に四百人ぐらいで入った。この収容所は元ソ連の罪人を入れた所らしく、二階建てで二棟もあり相当な面積であった。到着してから我々の手で周囲を三重に鉄条網で囲ったり、便所なども作ったりした。

衣服類はその時々に適したものを貸与された。作業の行き帰りには営門で人員調べをした。ソ連の兵士は掛算ができないのか、四列縦隊に並んでいても前より一人ずつ数えて調べるので五分も十分もかかるので、寒いときは足踏みをして待ったものである。仕事に行き、帰りには前面に将校と前後左右に自動小銃を背負った兵士が二人ずつ護衛をしていた。

最初の仕事は一里ぐらい歩いて馬鈴薯の収穫で、農場はコルホーズ（組合農場）で七十町歩もあり男爵芋であった。土は黒っぽくて、無肥料でよくできたらしかった。帰りには服やズボンのポケットに入れてきて、夜ペーチカで焼いて食べた。

十一、十二月は山林伐採作業で収容所より一里ぐら

い歩いて行った。山は天然林で樅、白樺、唐松などが多く、平坦地は少なかった。器具は一人用鋸、おの（タポール）で二人一組になって作業をした。ノルマは二人で四立方メートル（二メートル長さの木、二メートル幅、高さ一メートル）であった。場所が悪いとなかなか大変であった。

二十一年一、二、三月は ①雪かき作業（道路他）
②煉瓦工場の煉瓦運搬作業 ③貨物列車の粉炭下ろし作業（ノルマは二人で一車） ④コムソモリスク停車場の貯炭場の消火作業。

二十一年四、五、六月は ①山林伐採作業 ②馬鈴薯の植付作業で、男爵芋二尺×一尺に無肥料で植付けた。

二十一年七、八、九月は ①山林伐採作業 ②馬鈴薯と甘藍の中耕除草作業で、いづれも指導者がカツサライを使って指導した。悪ければ叱り、やり直させた。

二十一年十、十一、十二月は ①馬鈴薯の収穫作業
②山林伐採作業であった。

二十二年一、二、三月は ①山林伐採作業 ②雪か

き作業（道路、大工場） ③開墾作業（ブルで起こしたあとのならし作業等）であった。

収容所の転属

二十二年四月三日、コムソモリスク地区第一収容所へ二十人ぐらいで転属させられた。この収容所は非常に大きく千人ぐらいいた。仕事は建設作業で、工場など建築の基礎工事で幅一メートル、深さ二メートルにシャベルで掘るのだが、地面が凍っているので地面で火を焚いて溶かしてから掘るようにした。作業地までの往復には二列行進で、シャベルを担いで「赤旗の歌」を歌った。共産思想の盛んな収容所であった。

給食

第八、第一収容所とも労働はしても給与は悪く、朝はパイ缶半分ぐらいの高梁か燕麦のお粥に、パイ缶半分ぐらいの干タラの塩辛いだけのスープ、昼は百グラムの黒パンにスープ、晩は朝と同じような食事で、時には皮付きの高梁や粟のお粥のときもあった。皮付き粟のお粥は糞詰まりとなりやすく、それで死んだ人もいた。

栄養失調にて入院

二十二年五月五日、自分は栄養失調にて心臓の鼓動に変調を来したので軍医の診断を受けたら、すぐ入院することになった。病院はコムソモリスク第一病院で五、六人の人と一緒にトラックで送ってもらって入院した。私物は一纏めにして病院の倉庫へ預け、病院の衣服に着替えた。病院内は二段式ベッドで自分は下段だった。上段の人が小便を漏らしたときは困った。動ける人は交代で食事当番をやった。また、できる人は毎朝体操などもやった。医師は女医が多く、看護婦は大変親切で、一晩中苦しがつた日本兵に不眠で付き添ってしてくれたが、その日本兵は朝方亡くなった。

退院、帰郷

病院の食事は収容所に比べれば大変よくて、米の飯や黒パンの量も多く、菓を飲んだので約一カ月して体調は大分よくなった。昭和二十二年六月二日、医務室でレントゲンの透視してもらったら、軍医が大声でハラショーと言いました。それで六月五日に退院して、コムソモリスク駅を出発して帰郷の途についた。

六月五日、コムソモリスク駅出発

六月八日、ハバロフスク

六月十一日～十六日、ナホトカ

六月十九日～二十二日、西舞鶴

六月二十三日、自宅到着

二カ月間休養して体調を整え、九月より新制中学校教諭として平田村立平田中学校へ勤務することになった。

抑留生活での地獄と極楽

和歌山県 松本博文

大正十四年三月十日出生。三歳のとき父を亡くし（警察官であつた父は日置で釣り中、事故死したため、顔も覚えていない）、七歳のとき母と別れ伯父の家で養育を受け、農学校卒業後、朝鮮総督府の穀物検査所に就職。昭和十七年一月十日、釜山支所に赴任。昭和十九年十月十日、現役兵として羅南奏二一一五四部隊

歩兵中隊に入隊。一期の検閲後間もなく二十年四月上旬、北鮮訓戒^{くんじょう}まで行軍、陣地構築に挺身。途中北鮮の古茂山^{こもさん}を通過するとき、西林中尉殿に「おい、松本君ではないか」と声をかけられ、驚きと嬉しきでいっぱいであつた（紀南農学校の園芸の先生）。

連日、訓戒の陣地において蝟壺掘りをする事三カ月余、八月に入り飛行機の飛来しきりとなり、焼夷弾を落とし始めた。「これはおかしいぞ、ただごとではない、ソ連と開戦だ」ということで、弾薬を取りに行くやら大慌てで鉄橋を落したり道路を破壊したが時既に遅く、二～三日後、ソ連軍が怒濤のごとく川（豆満江）を渡り押し寄せてくる様子が肉眼でも確認できた。日本軍は兵器もなく（私は本来四一山砲であつたが、弾丸など皆無）、小銃は三人に一挺ぐらいではどうにもならなかつた。

陣地を捨て本隊に戻ると、今まで攻撃の続いていた砲声がはたとやんだ途端、日本は降伏したとの情報を初めて知る。時は八月二十二日ころで、終戦から一週間くらい過ぎていた。